

令和6年度 第1回京都市国際交流・多文化共生審議会 摘録

日 時：2024（令和6）年10月4日（金）午前9時30分～正午

場 所：京都市国際交流会館 1階 第1及び第2会議室

議 題：（1）京都市国際都市ビジョンの推進及びビジョンを踏まえた本市関連事業について
（2）今期テーマについて
多文化共生に係るテーマ：「外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、
多文化共生の担い手の育成」
国際交流に係るテーマ：「市民・民間主体の国際交流の裾野の拡大と
担い手の育成」
（3）今後の提言に向けて

出席者：＜京都市国際交流・多文化共生審議会委員＞
大熊晋委員、佐野真由子委員、孫美幸委員、チースレロヴァー・クリスティーナ委員、
浜田麻里委員（座長）、林建志委員、前田哲央委員、村上義委員、
リュウ・ウィトン委員
＜ゲストスピーカー＞
崎ミチ・アン准教授 同志社女子大学表象文化学部英語英文学科
前田哲央委員
＜京都市＞
松野 総合企画局政策推進担当局長、西松 国際交流・共生推進室長、
長谷川 同副室長、大久保 共生推進担当課長、檜山 企画調査係長、
大野 共生推進係長、城戸 係員

次 第：（1）開会
（2）議題
（3）閉会

配付資料：資料1 令和6年度の主な国際交流・多文化共生関連事業について（議題1）
資料2 今期テーマに係るこれまでの主な意見（議題2）
資料3 外国人住民の経験から考える日本における地域づくり（議題2）
資料4 芸術を媒介とした国際交流について ～芸術は多文化をつなぐ～（議題2）

1 議題1

＜浜田座長＞

それでは、事務局から国際都市ビジョンの推進に係る関連事業等の説明をお願いします。

＜事務局＞

（資料1に基づき説明）

＜浜田座長＞

ありがとうございます。京都市として様々な国際交流の取組を実施いただいているが、その内容が十分に市民に共有されているのか。取組について市民へ発信し、知ってもらうことが、本日のテーマにもある「裾野を広げる」ことにつながるのではないかと。私自身も熱心に情報収集をしているわけではないが、例えば、この委員の中で市に住んでおられる皆様はこのような情報を御

存じなのか。

＜事務局＞

各事業については、所管課が報道発表という形で市民の方、記者の方にお知らせしており、その際はできるだけ新聞で取り上げていただいたり、記者の方に取材していただく努力をしている。しかしながら、毎日多数の報道発表案件があるため、自所属の取組を取り上げていただくのは所管課も苦勞しているところである。

＜浜田座長＞

私自身も大学の情報がなかなか発信できず、いつも歯がゆい思いをしている。例えば小学校や中学校への出前講義の実施等は、情報発信の方法としていかがか。

＜事務局＞

現在は、少しでも取組に興味のある方へは情報が届くようになっているが、取組について全く知らない方に、初めて知る機会を提供することの難しさを感じている。本市の広報担当部署でも、SNS等を活用して様々な情報を各世代の方々に届ける工夫をしているところである。

＜浜田座長＞

先ほどインバウンドの観光の関係で、海外のインフルエンサーと連携しながら発信をしているとお聞きした。例えば同じように国内在住の外国人インフルエンサーと連携できれば、多文化共生の取組につながるのではないかと考えるが、そのようなインフルエンサーに対して、どのように依頼を行うのかお聞かせいただきたい。

＜事務局＞

観光プロモーション等は、基本的に委託金をお支払いして、依頼している。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。委員の皆様からも御意見を伺いたいと思うが、いかがか。

＜孫委員＞

資料1別紙の一覧表において、教育委員会人権教育担当の取組では、外国にルーツがある子どもたちを対象にしたもののみが記載されている。例えば私は、京都市内の学校の人権学習に講師として参加することがあるが、人権教育の取組の中でも異文化理解や多文化共生の取組が含まれているものだと感じており、もう少し幅広く取組を記載するのが良いと考える。

また、国の法令等が改正された際に、地方自治体がどのように動くのか、どのように京都市の施策に反映されるのかが見えれば、例えば子どもに関する法令が改正された際、外国にルーツがある子どもたちにどのような影響があるのか等が分かりやすくなると考える。

最後に、ジョホールバル市に係る取組については、環境の分野の方々の中で共有されているだけでは非常にもったいないと感じる。ジョホールバル市は、親子留学のメッカになっており、日

本の親子の英語留学が盛んである。京都でこのような連携があるということを知れば、京都に住む方々の見方も変わるのではないかな。

<浜田座長>

ありがとうございます。恐らくどこの部署も事業そのもので手いっぱいだろう。しかし、それらを連携したり、国際や多文化というキーワードでつなぎ合わせるようなことができると、もっと効果が上がるという点について、賛同する。

そのほかいかがかな。

<佐野委員>

様々な部署の取組を、国際交流・多文化共生という観点で全貌として見せていただける、また、費用の掛かっていない取組も一覧に加えていただいていることは賛同できる。孫委員がおっしゃったように、さらに広く拾えるものもあると思うので、そこはこれから充実させていっていただきたい。浜田座長がおっしゃった、どこの部署も事業そのもので手いっぱいというのはそのとおりなのだろうが、直接関係のある方に情報が届くというフェーズと、京都市の全貌、イメージとして取組が広く伝わるというフェーズでは、異なる努力が必要だと考える。後者は、国際交流・共生推進室が先導して行っていくべきことで、それがあってこそ各部署が事業に力を注げるのではないかな。

<事務局>

佐野委員のおっしゃったとおり、国際交流・多文化共生全体の重要性について発信するのは当室が努力すべきことだと考えており、何ができるか検討を進めたい。

2 議題2

<浜田座長>

では、次の議題、「今期のテーマについて」に進ませていただく。まず、多分共生に係るテーマ「外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、多文化共生の担い手の育成」について、同志社女子大学の崎准教授に御講演をお願いします。

<崎准教授>

(資料3に基づき説明)

<浜田座長>

ありがとうございます。非常に興味深い研究の結果で、私もたくさん討論したいことがあるが、まず、委員の皆様から、崎准教授の御講演に関する御質問や御意見をいただき、その後、外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、多文化共生の担い手の育成について討論を行いたい。何か御意見はあるかな。

<林委員>

崎先生、ありがとうございます。いつも協会の事業にも協力いただきありがとうございます。

非常に感銘を受け、とりわけこの地域社会にいかに関与するかというワードを使われているのが非常にすばらしいと感じた。先ほど事務局からの挨拶にもあったように、外国籍の方が急激に増えていて、どちらかという、受益者として何を与えるかという施策が今まであったが、逆に外国籍の方が地域の担い手となる、松井市長がよくおっしゃっている新しい公共の担い手となっていただく、その方が先ほどの報告の中にもあったように外国籍市民の方自身が居心地が良くなるというようなことで、この言葉はすごく良いと思う。

そういう意味では、後ほどの議論になるかもしれないが、事務局から先ほど報告のあった関連事業の国際都市像の4番目の③、「外国籍市民等による地域・市民活動への参加促進」ということがあるが、それに即した事業があまりない気がしている。例えば先ほどの、受け手側がこうすれば外国籍市民の方に町内会に入ってもらえるというテキストやマニュアルみたいなものがあれば、町内会の人もやりやすいと思った。

また、質問だが、レジメに多文化共生マネージャーの重要性というところで組織間の連携と書いてあり、おっしゃるとおり、それぞれの連携というのは非常に重要だと思うが、とりわけ市役所や特に地域の最前線の区役所との連携、この部分で実際に困ったことや課題をひとつお聞かせいただきたい。

もう一つは、私も今年、町内会の副会長をしており、来年、会長になるが、地蔵盆について、先ほどの文化の違いの寛容性、柔軟性という意味では、どちらが寛容に、柔軟になるべきかと。地蔵盆を文化というふうに捉えるのか、京都では伝統文化とかと位置づけているが、やはり違う宗教の方は違和感があるのではないかなと思っており、町内会をやっていたら、何か変だなと思われたことがあるのか、お聞きしたい。

<崎准教授>

分かりました。ありがとうございます。

最初の連携について、私は京都市の国際室と長い付き合いだが、京都市の国際室は非常に忙しく、連携するのは本当に大事だが、時間も掛かる。様々なところに出向いて、関係をつくるのは大変なことである。例えば、ある国際交流協会では、1名の市役所の方の席があり、その市役所の方が国際交流協会に行って、どのような事業をやっているのか把握でき、市役所に帰る時にそれを伝えることができる。そのような連携が京都市で可能か、以前にあったのか分からないが、私が訪ねたほかの国際協会ではいくつか実施しており、連携がうまくいっていた。

もう一つは、これは可能か分からないが、ある国際交流協会は県庁、府庁が近くにあり、日本人市民、外国人市民の方が、その国際交流協会がどういう役割なのか、どういうことをしているのか、留学生、外国人のための組織だけではなくて、その市民のためのセンター、組織であることを知らない人がいないと。そのような場合、参加している日本人市民が多いと思う。また、あるところは市民しんぶんのような発刊物があり、2、3箇月に1回国際交流のページが必ずある。それが1つ、答えになるかどうか分からないが。

もう一つは地蔵盆。私は、町内会の地蔵盆担当で、地蔵を家に持って帰る役になったことがある。地蔵を洗ってお供えをするということで、マニュアルもなくどうすればよいか分からなかったが、周りの人に尋ね、何をお供えすればよいか、それはスーパーで買えばよい、など教えていただけて非常に勉強になった。私は日本文化が好きなので、違和感は覚えなかった。地蔵盆は魅

力が非常に多いので変える必要はないのではないかと思います。

<チースレロヴァー委員>

そもそもお地蔵さんがある時点で仏教ではないか。だから、数珠回しがあるとかないとかそこまで大きな差ではないと思うが。

<崎准教授>

そこまで変える必要はないと思っている。逆に、外国人市民がそれに柔軟性をもって、おもしろいと感じるのではないか。

<チースレロヴァー委員>

逆に、こんなことをやっているのかと、おもしろく思うのではと考えている。

<林委員>

分かりました。ありがとうございました。

<浜田座長>

宗教についての考え方は人によっても違い、自分が属している宗教によっても考え方が違うので、恐らく今、崎先生の発表にもあったように、こうではないかというふうに固定観念で見ず、コミュニケーションしながら色々なことを決めたり、考えたりしていくということが大事だという問題提起だと感じた。

ありがとうございます。そのほかいかがか。

<前田委員>

崎先生、おもしろいお話、ありがとうございます。

個人的にすごく興味があったのだが、コミュニケーション能力の課題について、両者の異文化間のコンピテンスを向上させるために教育やワークショップの実施が効果的だと資料に記載がある。個人的にもそういうワークショップや会合を積極的に実施したいと思っているが、事例として何かお話しただけのことがあるか。

<崎准教授>

ありがとうございます。私は、異文化コミュニケーションとは何か、意味を説明し、レクチャーするスタイルではなく、インタラクティブなワークショップを実施している。実際にこういう場面があったらどうするかというケーススタディや、ロールプレイを行っている。例えば私が経験した例だと、無言語で、日本語、英語、他の言語も使わずにコミュニケーションをとり、課題をどのように達成するか、というゲームがあった。

また、様々なロールプレイをすることで、自分の意識を高めることと異文化コミュニケーションがどんなものなのか、外国人市民、逆に日本人市民とコミュニケーションをとる時に何が必要なのか、ということ学ぶ目的でワークショップ等を開催している。小学校や企業、京都市交通局

などからも依頼があり、多文化共生について聞いたことはあるがどんなものか分からない、仕事でこういうエピソードがあったがどうしたらよいのか分からない、というような質問に沿ってロールプレイを実施した。

<前田委員>

非言語で、言語を使わずというのが非常に印象的だ。

ありがとうございます。大変勉強になった。

<浜田座長>

ありがとうございます。そのほかいかがか。

<孫委員>

ありがとうございました。様々に活躍されながら、インタビューも実施されて、御発表に非常に元気をいただいた。

先ほど新しい公共という言葉があったが、京都だけでなく日本全体で人口減少、高齢化しており、人手不足で町内会を誰もやりたがらない現状がある。ちょうど私が暮らしているマンションでも町内会を抜きたいか、抜けたくないかのアンケート調査が行われ、マイナスな面を感じるものが多くなった。その時に逆に外国の人にやってもらえば良いのではないかと、変に使われてしまう、押し付けられてしまう恐れについて、調査の中で、また実際に町内会で活躍された中で感じられたことや御意見を伺いたい。

<崎准教授>

町内会のやり方を変えなければならないと思っている。面倒くさい、利益がない、子どもも大きくなり地蔵盆をやっても参加しない、時間がないというような理由で、日本人の方でも参加を避ける現状がある。町内会にも良さが多くあるが、それを誰もあまり意識していないと思っている。情報発信が大切であり、町内会に入ってその良さを伝える必要があると思っている。

地蔵盆でのエピソードがもう一つある。コロナ以前の地蔵盆で、朝の9時から4時、5時頃まで、お菓子や御飯を配ったり、私は母語が英語なので英語の絵本の読み聞かせを行ったりした後、打上げがあった。挨拶を交わす程度だった方とも非常に親しくなり、ある方が「崎さんは外国人ですね。町内の人は知らないかもしれないが、私は外国のルーツを持っています。」と話してくださった。年配の方で、その地域の歴史も教えていただいた。その方は「初めて打ち明けたのは崎さんだけです。外国人なので、私の気持ちが分かるかなと思って。」とおっしゃっていた。その後もこのような話題が続き、フィリピンの生まれだという方など、今まで差別を恐れて打ち明けられなかった方も、皆がカミングアウトしてお互いを理解し合うことができた。その後、次のイベントや、参加率の悪かった防災訓練等にも皆が参加するようになり、交流が深まった。

町内会には良いところがたくさんあるが、今はそれに関わりたくない方、面倒くさくて避けている方が多いので、例えば若い方が会長になるなど、やり方を変える必要がある。私は京都が大好きで28年間住んでいるので言いづらいことだが、考え方を柔軟にしなければ何も変わらないと思っている。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。そのほかいかがか。

＜チースレロヴァー委員＞

ありがとうございました。個人的に一番響いたのが、コミュニティリーダーというキーワードだが、京都には国際化に関わるリーダー的な人材、システムがあまりないと感じているので、是非あればよいと思った。外国人でなく日本の方でも、一般市民の方と外国人コミュニティの架け橋となるような方がいれば、よりお互いコミュニケーションを取り合って理解でき合うのではないかなと思った。

また、事例の中であった、日本語を話せない方が市役所等に来られたときなど、すぐ連絡できて何かあったときに助けてくれるような人材がいるというのが、逆になぜ今までなかったのか聞きたいほど非常に良いアイデアだと感じた。

ありがとうございました。

＜崎准教授＞

ありがとうございます。コミュニティリーダーというとハードルが高くて、誰もが取り組めないかもしれないと思っている。私の研究の結果によると、コミュニティリーダーは、例えば日本人で1、2年間留学をした方が、外国人としての生活を経験して日本に帰ってきて、その後、京都に、日本に住んでいる外国の方に何か貢献したい、と思いつくことが多いと考えられる。貢献したいが、国際交流会館等の施設を知らなかったり、外国人市民が近くにいても、声を掛けて変に思われたら、と遠慮してしまうということもあるのではないかな。

私もそうだが、外国人市民は日本人市民に対して何かしてあげたいという意思がある。外国人市民も色々なノウハウや知識があり、貢献できる場も多くあるはずだが、遠慮してしまうことや、情報発信が不足していてそのような場を周知できていないことが残念である。

だから、国際多文化リーダー、コミュニティリーダーがいて、架け橋として簡単な取組をしてくれば、改善できるのではないかと考えている。

＜浜田座長＞

チースレロヴァー委員は、もし日本のほかの地域や、あるいはほかの国でそういう活躍をするようなシステムについて、御存知のことがあれば御紹介いただければありがたい。

＜チースレロヴァー委員＞

地域によっては日本国内でもそういうシステムがある。私はそのような情報を耳にしたことがあったので、今回改めて、非常に大事なことであるのになぜ京都にはないのか、と思った。外国人コミュニティは恐らく国によって分かれていたり、あるいは私のようなマイナーな国だと同じ国の方がいなかったりするので、例えば学区ごとの担当の方にコミュニケーションを援助していただけるような仕組みがあればよいかなと思った。

<浜田座長>

ありがとうございます。

京都市国際交流協会は、コミュニティというのとは位置付けが違うかもしれないが、外国ルーツの職員の方が多く活躍されていると思うが、林委員から何かコメントをいただけるか。

<林委員>

コミュニティリーダー、崎先生の文脈で言うと、受け手側の町内会の会長等も指しているのかと思ったが、いかがか。

<崎准教授>

私がコミュニティリーダーと言ったのは、多文化の話ではなくて、町内会の中のことである。

例えば、京都市内の外国人の多い地域で、英語、日本語、スペイン語を話せる方が、外国人市民にごみの捨て方などを教え、日本人市民とぶつかり合いがあれば、彼女が間を取り持った。正式な役職ではないが、その区の町内会では彼女が担い手となっていた。

<林委員>

協会で実施しているのは、まず困っている方に対して、今年度ベトナム語が追加された行政通訳相談制度という形で、様々な相談ごとを役所にそれぞれつないでおり、総合相談窓口でもボランティアの方を含めて様々な相談を受けているが、内部のつながりにとどまっており、更にポジティブに、地域につなぐというところまではできていない。

おっしゃるように、協会としては建物の外に出ていく必要が迫ってきている。ただ、人員が非常に厳しく、その辺りは職員も苦勞しているので、少しずつ進めていく必要があると思っている。

<浜田座長>

ありがとうございます。ほかにはよろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、崎先生に非常に貴重な御意見をいただいた。また、後ほど意見交換の中で議論を深めたいと思うが、1つ目の話題、「外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、多文化共生の担い手の育成」については、ここまでとしたい。

崎先生、本当に素晴らしいスピーチ、ありがとうございました。

<崎准教授>

ありがとうございました。

<浜田座長>

ありがとうございました。崎先生はこれで御退出となる。

それでは、続いて国際交流に係るテーマである「市民・民間主体の国際交流の裾野の拡大と担い手の育成」について、前田委員からお話いただく。

<前田委員>

<浜田座長>

ありがとうございました。様々なプロジェクトに関わっておられるということで、最後の御意見もなるほどと伺わせていただいた。

それでは、御質問、御意見を委員の皆様から伺いたいと思うが、いかがか。

<チースレロヴァー委員>

ありがとうございます。文化は言葉以外でコミュニケーションできるツールでもあり、お互い言葉が通じ合わなくても何なりとを感じるための大事なツールだと思っている。私自身も伝統文化に関わっている者として、西洋文化を日本に持ってくるだけでなく、伝統文化のコラボレーションや、お寺、神社を使って企画を行うのは、外国人のためだけではなくて日本人や日本文化にとっても非常に良いことだと感じた。

というのは、やはり日本の方は逆輸入に弱い。伝統文化が古くさいと思っている方が多いと思うが、少しフレッシュな視点を提供すれば、実はかつていいものだ、何か新しいものが生まれてきて伝統文化の保存にも役に立つのではないかと考えた。

<浜田座長>

ありがとうございます。前田委員、いかがか。

<前田委員>

本当におっしゃるとおりで、日本人は逆輸入に弱いと感じている。

外国の文化と日本の文化が溶け合うことによって新たな文化が生まれるということが非常に大事である。外国の文化をしっかりと学ぶことによって、日本から新たなものを海外に向けて発信できるような形が更に取れるようになれば良いと思っている。

<浜田座長>

ありがとうございます。そのほかいかがか。

<事務局>

前田委員、貴重なお話をありがとうございました。

このような様々な企画の運営面のことでお尋ねしたいのだが、運営に今後担い手となるような若い方に関わってもらう、この取組を今後続けていってくれる人を育てるというような視点で意識されていることがあれば、是非教えていただきたい。

<前田委員>

具体的に申し上げますと、京都市の芸術大学の学生さんにお手伝いをいただくことがある。やはり京都市立芸大の方は非常に優秀な方が多く、音楽の分野で実際に公演のステージマネージャー、あるいはその受付をしていただいている。そこから外国のアーティストの方と接点ができ、例え

ば留学につながる、留学先におけるコミュニケーションにつながるということもあるので、今後も続けていきたいと考えている。

先ほどの崎先生が同志社女子大学の先生でいらっしゃるの、国際交流に興味を持たれている方にお声掛けいただき、相互交流が図れるようになれば良いと考えている。

京都市の大学生では、京都外大の方にも協力いただいている。

<浜田座長>

前田委員が大学の先生方とともに事業を実施する形で、その中で学生を派遣いただいているのか、それともアルバイトを募集したら、その分野に関心のある人が応募してきたということなのか、御教示いただきたい。

<前田委員>

公演に御出演いただいている方、日本人のバイオリニストやアーティストの方の後輩の方が来てくださる事例が多い。京都市立芸大の卒業生の方の後輩で、現在大学生として在籍されている方が多い。先生方にも協力をいただいて、もう少し多角的にやっていただきたい思いはある。

余談だが、今、京都府の音楽祭の立上げに関わっており、そちらも京都市立芸大の方にお手伝いいただくことになっている。

<浜田座長>

先輩からの口コミのようなものがきっかけで、関わってくださるということか。

<前田委員>

そうである。大阪でもバレエ公演を開催しているが、大阪では大阪芸術大学の学生とのつながりがあり、毎年手伝っていただいている。

<浜田座長>

ありがとうございます。そのほかいかがか。

今のお話では、芸術に関心のある方が、自分のキャリア形成にもつながるので関わってくださるということだが、外国に興味がある方々との関わりは何かあるか。様々な文化と関わりたいという方々、自分自身が芸術家である人たち以外の方々との関わりというところで、ネットワークを広げるために取組んでいることはあるか。

<前田委員>

コミュニティづくりについては、前回の審議会でも少しお話ししたが、単純に外国人との交流の飲み会を企画させていただいており、海外から参加していただくアーティストの方に演奏していただきながらの交流会を時々開催している。日本人の方を含め、ヨーロッパをはじめ各地の方々にお集まりいただき、多言語交流を実施している。フランス語と英語、日本語が中心になるが、様々な言語で交流いただく企画を実施している。

<浜田座長>

ありがとうございます。そのほかいかがか。

<村上委員>

ありがとうございました。私も海外で生活した経験があり、2000年にハンガリー、2014年からチェコに行ったが、受けた印象が全く違う。この10年間で日本に対する理解がかなり進んだように感じた。前田委員がおっしゃったような、例えば日本のアニメやゲームを見た世代が大人になってきて、かなり日本に対する理解が深くなってきたと感じており、文化の力はすごいと思った。海外にいて居心地が良く、理解してもらえているという感覚が非常に高まったと思っている。

今後、このような活動は非常に大切だと思っており、日本の文化を海外に発信される方がいらっしやってこそ、日本の企業の取組も随分進んでいると思っているので、是非これからも活動いただきたい。

<浜田座長>

ありがとうございます。

それでは、前田委員の御報告についてはここまでとさせていただきたい。前田委員、貴重な御報告、ありがとうございました。

それでは、残りの時間で、今期テーマに係る議論について御意見等を伺いたい。

まず、1つ目の多文化共生に係るテーマについて、特に外国人市民の方が地域コミュニティに参画していくと。今日の崎先生からの御報告にもあったが、何か世話をさせていただくとか支援を受けるという側ではなくて、自分自身が主体として地域に貢献していくという観点での取組や、あるいはそのような多分共生を担っていく人たちを確保・育成していくにはどうすれば良いか。今までいただいた御意見に加えて、何か御意見、あるいは数年で実現できないことでも、具体的な制度や行政でのサポート等の案について、是非御意見、御提言をいただきたいが、いかがか。

大熊委員、いかがか。

<大熊委員>

外国籍の市民の方はお客さんではなく、国籍が違っても、京都に住んでいる方という意味では、同じ住民なので、何かする側、される側というよりは、一緒に何かに取り組める関係を築けるのが良いと改めて思った。

もちろん、困りごとについて、マイナスをプラスにすること、皆が安心して暮らすためのスタートラインに差がある部分は埋める、補うというのは必要なことだと思っている。そこからより楽しく、より豊かにという部分に関しては、それぞれの立場の方が持っている自分のスキルや知識、能力を使って、お互いに楽しめる、お互いに持ち寄ってシェアできるようなものが醸成されていくと良いと感じた。

例えば、青少年活動センターにおいて、普段は日本語を習いに来ている外国人の方が、別のイベントで先生役として教えるということがあった。日本語教室の場面では「ありがとうございました」と言って帰っていくが、このイベントの場面では彼がホスト役になり、様々なことを準備

してきて、生き生きと自分の国のことについて話してくれた。いつも感謝するばかりではなく、時には人から感謝され、自分の持っているものを発揮できるような機会が作れると良いと思っているが、なかなか個人でできることではない。その思いを引き出し、何かやりたいと思ったときに、小さなイベントでもいいので形にできる仕組みがあれば良いと思っている。持込企画を形にする枠組みさえあれば、具体的な内容はそれぞれの現場に任せられるような施策でも良いと思っている。

また、先ほど崎先生のお話を聞いて、リーダーシップを発揮して人と人をつなぎ、後押しするような方は、1人は必要だと感じた。その際に、小さい成功体験の積み重ねも大きな要素になると思っている。コミュニケーション能力として、自分から一声掛けるのは大切だが、それができるかという、躊躇してしまうこともあると思う。声を掛けたら相手が笑ってくれた…というような、日々の中での小さな成功経験の積み重ねが、「挑戦してみよう」という気持ちにつながると思っている。そのためにどうするか…が難しいが、大きい話を聞きながら、日々の生活の中でそういうことを感じることも大事だと感じた。

<浜田座長>

貴重な御意見をありがとうございます。

前半の崎先生の御報告の中で、例えば外国人市民の方が空手を紹介するイベントや、崎先生自身も町内会で文化の紹介のイベントをされていたというお話があったが、そのような取組をサポートできる仕組みがあると良いという御意見か。

申請書などを書くとなると、恐らく非常に高い日本語能力、日本語ネイティブでもなかなかいような日本語能力が必要になるので、そこも含めてサポートして、町内会単位、あるいは外国人市民の方御自身が何か応募できるような事業があればよいということか。

<大熊委員>

はい。

<浜田座長>

ありがとうございます。

<林委員>

大熊委員は、多文化共生を考えたときに、上からではなくて、やはり市民の、地域での生活レベルを基本として、そこからどう広げていくかということが一番重要な視点だとおっしゃったと思う。これから外国籍市民の方が増えるというが、驚異ではなくむしろ実は地域間の取合いになるかもしれないと思っている。人口が減少し、町内会が弱体化してきた中で、そういう方に入っていて、任せてしまうのではなく、協働する、担い手となっていくための方策を考えていく必要があると思っている。

具体的な例として、繰返しになるかもしれないが、例えば町内会長も順番で回ってくるので、なかなかノウハウもない中で、このような声の掛け方があるというようなマニュアルなどがあれば良いと思っている。区役所や地域自治推進室の仕事になってくるかと思うが、そういうところ

もウイングを伸ばしてやっていただくのはいかがか。また、既存の制度の中で地域で活動している外国籍市民の方が京都には多くいらっしゃる。京都市国際交流協会の事業として、留学生の方を男女５人ずつ１０人募集して、錦林東山学区の体育祭で、前日から準備を一緒にさせていただき、一緒に競技に参加する取組を行っているが、ただ参加するだけではなく、よく見ると明らかに外国の方が体振委員の格好をしていらっしゃる場所もある。そういう事例も広げて、もし何か制度の壁があるならば、変えていくようなシミュレーションを行うのが良いと思っている。

また、京都市では、消防団も加入率が年々減ってきている。消防団も大変な問題があると思うが、自治体自身で行っている工夫をもう少し、もう一歩進める努力をしていければ良いのではないか。また、国の制度の民生児童委員なども、他国の事例を参考にしながら、これは我々の提言の範囲かどうか分からないが、国の制度としても改めていくことも視野に置くのはいかがかと思っている。

<浜田座長>

貴重な御提言、ありがとうございます。恐らく、消防団員の制度は今、変更が必要ではないかということで議論が始まっているかと思う。

同じような形で、例えば公的な、今は国籍条項があるようなものでも、それと連携するような形で外国にルーツのある市民の方にも関わっていただくのは良いのではないか。先ほど孫委員から使われてしまう危険もあると意見があり、その面にも注意が必要だが、公的な場面で外国人の方が活躍されることで、ほかの外国ルーツの市民にも勇気づけになるし、あるいは一般市民にも、京都市にも確かに外国ルーツの市民の方が増えているなという意識変革にもつながり、色々な効果があるのではないかと思っている。

ありがとうございます。

それでは、リュウ委員、いかがか。

<リュウ委員>

私は京都市で生活している外国人について少し話したい。

例えば、外国人が区役所へ行った際に、タブレットやビデオを見られるように作成して、京都市でどのような国際活動に参加することができるかを周知するのが良いのではないか。ビデオの中で写真や、外国人と日本人の共同活動の様子、以前のイベントの紹介ができれば、日本語を理解するのが難しい外国人であっても、非常に理解しやすいと思っている。

また、タブレットやビデオに、例えば外国人市民がアイデアや意見を投稿できる連絡先を掲載できればよいと思っている。直接、自分が参加したい活動のアイデアや、協力したい内容を伝えられると良いのではないか。

<浜田座長>

具体的な御提案ありがとうございます。情報提供についても課題になっていたが、そのようなものを様々な言語で作って、それこそ外国ルーツの市民の方に主体になって作ってもらえれば、情報発信もでき、外国ルーツの市民の方にも役に立つ。SNSも使いながら、そういったネットワークもできるようにしていく、非常に具体的なアイデアで本当に実現すれば良いと思う。

そのほかいかがでしょうか。

<村上委員>

これまでの議論で既に出たかもしれないが、教育の面がやはり大事だと思っている。

私どもJETROは高度外国人材の活用ということで、特に中小企業に外国人の方を採用していただき、海外との取引を進めていくなどの活動をしているが、色々と衝突や失敗があり、必ずチューター、ケアする人を付けているが、やはりそれだけだとうまくいかない。その会社全体で制度を変えると、逆差別ではないが、あの人が欲しいから会社の制度が変わったと思われてしまい、逆に居づらくなってしまうということもある。しかし、そうではなくて、会社全体で外国人を受け入れることを理解してもらうためにも、教育を進めなければならないと感じている。

これから日本も人口減少で、一人当たりのGDPを維持するには、人口の約10%は外国人にならなければ一人当たりGDPが下がると言われているが、それほど数の外国人の方になると、ある程度抵抗感がある人が増えていくことが、欧州を見ると予想される。日本はこれからそうならないように若いうちから多文化共生に関する教育を進めていかなければならないと感じている。

<浜田座長>

ありがとうございます。今、ヨーロッパ各国で移民受け入れに否定的な政党が議席を獲得するということが進んでいて、そういうことが日本で起こらないようにするためにも、非常に貴重な視点だと思っている。崎先生のお話の中で、やはり日本がまず変わらないといけないのではないかという意見もあったが、そこにもつながる御提言ではないかと思う。

それでは、最後に、国際交流に係るテーマ、市民・民間主体の国際交流の担い手の確保、育成についても、是非御意見、御提案をいただきたいが、いかがか。

<孫委員>

前のテーマにも関わるが、今、東京と埼玉の間にある大学にいるが、埼玉のクルド系の方々へのヘイトとバッシングの情報を鵜呑みにしてしまっている学生たちが一定数いる。関西ではそこまでクルド系の方々へのバッシングはないが、それを鵜呑みにしてしまうのは困っている。これまでの主な意見で、外国人を歓迎する情報発信について言及してきたが、やはり差別にきちんと反対するという発信も非常に重要だと思っており、ヘイトスピーチ解消法の後にかなり細かく、この審議会の前身の審議会で、京都市で解消法をどういうふうに反映するかということで、文章をかなりチェックした覚えがある。それから時間が経っているので、再度確認する必要があるのではないか。

<浜田座長>

ありがとうございます。様々な国際情勢を知らないからこそ、そういったヘイトにもつながってくることもあるので、その部分を含めて点検も、1回やれば終わりではなく、絶えず続けていくということが差別と戦うということかと思うので、非常に貴重な御意見をいただいた。

そのほか国際交流に関して何か御意見はあるか。

<チースレロヴァー委員>

教育というキーワードが先ほど何回か出ていたが、やはり日本の若い方に対する教育が非常に重要だと思う。今の日本の若い方はあまり国際交流や留学に興味がない印象を受ける。海外旅行に行く方も減っており、以前、ハーバード大学の奨学金の日本人枠が埋まらないということをごどこかで聞いて衝撃的だった。無料でハーバードに行けるのにいきたい人がいないというのは、1つの象徴として考えるべき点ではないかなと思う。具体的にどうするかというのは大きな問題なので、あまり私個人としては言えないが、学校教育から受験のための英語教育と別に、もう少し普通に興味を持ってもらうところから何かアプローチした方が良いのではないかな。

<浜田座長>

ありがとうございます。本当に未来を担ってもらう人材の育成で、教育というのは一番大事なところだと思う。

3 議題3

<浜田座長>

今日も本当に様々な御意見を出していただき、ありがとうございます。意見交換はここまでとさせていただきます、最後の議題、「今期の提言に向けて」に進ませていただきたいと思います。

まず、事務局から今期の提言取りまとめに向けた進め方について説明をお願いします。

<事務局>

提言の取りまとめの進め方については、まず第2回、3回の審議内容を基に事務局で提言案を作成させていただく。案は、浜田座長に御確認をいただき、内容を事務局と浜田座長の間でまず調整をさせていただく。そのうえで、次回の会議で委員の皆様にお示しして意見をいただく流れで進めたい。

<浜田座長>

ありがとうございました。今、御説明のありました今期の提言取りまとめについて、御説明のとおりで進めさせていただいてよろしいか。

<全委員>

異議なし。

<浜田座長>

では、進め方について御承認いただいたものとさせていただきます。

事務局で、これまでの意見、それから今日いただいた御提言を調整いただいて、次の会議で皆様にお示しをさせていただきたいと思う。その後、もし今日お話しいただいたほかにも何か御意見があれば、直接事務局の方にお送りいただきたい。

4 座長によるまとめ

＜浜田座長＞

今日も様々な御意見をいただいた。外国籍市民の方に主役になって京都市を支えていただく、活躍していただくということで様々な具体的な御意見があった。市役所や国際交流会館など、色々な関係を強化していく中で、環境づくりを進めていくという観点も崎准教授から御提言があり、様々なコミュニティリーダーといったような方への働きかけ、あるいはそういった人材の育成ということの大切さについてのお話もあった。また、芸術分野で、世界で活躍されていくような人材が育成されているという非常にうれしいお話もあった。そのほか具体的に市民の方の活躍を後押ししていくような企画についても、委員の皆様から御提言をいただいた。

その辺りを中心に、今期の提言書の取りまとめを進めさせていただきたいと思っている。

それでは、本日の議事は、ここまでとさせていただく。進行を事務局にお返しする。

5 閉会

＜西松室長＞

皆様、本日はおよそ2時間半にわたって御議論いただきありがとうございました。既にお帰りになられた崎准教授、そして前田委員には、貴重な時間の中、御準備いただきありがとうございました。

以上をもちまして令和6年度の第1回、今期第3回の審議会を終了させていただきます。

本日いただきました各委員からの御意見は、庁内の国際交流・協力部会と多文化共生部会等を通じて関係課のあるものは関係課の方に伝えさせていただき、我々の事業の参考にできるものはさせていただきたい。

それから、議題3で申し上げたとおり、次回の会議で提言案をまとめていただくことになるので、浜田座長にも御確認いただいたうえで、皆様にあらかじめ示させていただき、会議で御議論いただきたいと思います。

本日の議事録は、記名で公開することとなるので、後日皆様に確認させていただく。

次回の会議の日程は、来年の2月から3月を予定している。追って日程調整をさせていただくので、どうぞよろしくお願いする。

本日はどうもありがとうございました。

(了)